

シーボルトのつくった統計表を求めて
—日本統計事始の一齣—

In Search of Statistical Tables edited by Philipp Franz von Siebold:
An Episode in the Early History of Statistical Survey in Japan

細 谷 新 治
Shinji Hosoya

Résumé

I made an investigation on the history of statistical surveys in the early period of the Meiji era as a part of the research project "Estimates of Long-Term Economic Statistics of Japan since 1868" which was carried out by Professor Kazushi Ohkawa and others during my tenure of office at the Information and Documentation Centre for Japanese Economic Statistics, the Institute of Economic Research, Hitotsubashi University.

From this study, I found two historical episodes. The one was that Koji Sugi, the first chief officer of in the Central Statistical Office of the Japanese Government, used European techniques of statistical survey to take the census of Yamanashi Prefecture in 1879. This was the first undertaking to apply the European statistical survey techniques in Japan.

The other was that Philipp Franz von Siebold introduced European techniques of statistical survey into Japan in the last days of the Tokugawa shogunate, which was before Sugi's undertaking. He who stayed at *Deshima* in Nagasaki educated Japanese students at his private school and had a great influence upon the Japanese society at the dawn of a new era. It is said that he taught his students how to interpret European style statistical and tables how to use statistical survey techniques.

He also made the statistical tables of the Japanese-Dutch trade and the rice production, prices, and populations in Japan by using documents in the Dutch merchant office at *Deshima*. Although he had a plan to include these statistical tables in his masterpiece "Nippon", which was published after he was expelled from Japan and returned to the Netherlands, he couldn't succeed in accomplishing it.

A massive amount of the materials collected by him in Japan were scattered in the Netherlands, Germany and England. Parts of his materials including his manuscripts for "Nippon",

細谷新治：千葉商科大学商経学部講師，千葉県市川市国府台 1-3-1
Shinji Hosoya: Chiba University of Commerce Konodai 1-3-1, Ichikawa-shi, Chiba-ken.
1990年1月8日受付

however, were fortunately preserved under the name of Die Sieboldiana-Sammlung at the Ostasien-Institut der Ruhr-Universität in Bochum, West Germany. With the assistance of Dr. Vera Schmidt who had completed the drafts of the precise descriptive catalogue of the collection, I made a visit to the Insituts in September 1988 and found almost all the statistical tables edited by Siebold which I had been searching for a long time.

It is my desire that these statistical tables would make some contribution to the Siebold study from a social science viewpoint in Japan.

- I. 経済統計との関わり
 - A. 「長期経済統計」
 - B. 「明治前期日本経済統計解題書誌：富国強兵篇」
- II. 日本の統計の先覚者 杉亨二
- III. シーボルトと日本の統計
 - A. シーボルトの統計学教育
 - B. 日本追放と“Nippon”の刊行
- IV. シーボルト「日蘭貿易史関係統計表」を求めて
 - A. ベルリン日本学会所蔵シーボルト文献の行方
 - B. 西ドイツ中央図書館とルール大学東アジア研究所の調査
 - C. 「ルール大学シーボルト・コレクション蔵書目録」
- V. その他のシーボルト・コレクションの行方

I. 経済統計との関わり

A. 「長期経済統計」

本日は橋本記念講演ということでございますが、私はどうも講演というのは苦手です。皆さんのむずかしい研究発表の間の気楽な漫談ということで、西ドイツへシーボルトのつくった統計表を探しに行った話をさせてもらいます。その前に、なぜシーボルトの専門家でもない私がこういう羽目になったか、そのいきさつを申し上げます。

私は、戦争が終わった年の昭和20年10月から56年の3月まで36年間、一橋大学に勤めましたが、その間38年から53年までは経済研究所の日本経済統計文献センターという所にいました。これは研究所にあります研究専用施設ではありません。明治以降の日本経済統計資料を網羅的に集めてこれを全国の研究者に公開利用する共同利用施設なんです。そこで私は明治時代の古い統計を集めるという仕事をやっておりました。そのころ経済研究所では、大川一司教授という方が中心となって、篠原三代平教授や梅村又次教授など多くの先生方や協力

者を動員して、明治以降の日本の経済統計の一貫した系列をつくる大作業にとりこんでいました。

この作業というのはそれはたいへんなもので、まず埋もれた統計を発掘しなければならない。折角見つけても統計調査の方法が違えばこの数字を簡単につなげるわけにはいかない。これを整合的につなげるために様々な統計的手法を使わなければならないのです。また全体の整理のための枠組みは国民経済計算という理論的な体系でやっていますから、消費支出の系列は他の生産とか所得とかの系列と整合するかどうかというチェックをしなければならない。こうしてできあがった数値を国民経済計算体系へまとめてゆくわけです。まあとにかく龍大な人数を動員してようやく先月完成いたしました。東洋経済新報社から刊行された全14巻の『長期経済統計』がそれです。最初の巻が刊行されたのが昭和40年ですから実に四半世紀の歳月をかけた大事業でした。先生方もたいへんでしたが、これを辛棒強く待った東洋経済新報社もえらいと思います。こういう仕事は外国では歴史統計と呼ばれていて、アメリカではサイモン・クズネツという先生が先駆者です。イギリスでもミッチェルとい

う人の仕事があります。しかし、この大川先生のグループの長期経済統計の仕事は、そのような外国の仕事にくらべても少しもひけをとりません。日本の経済学界というのはあまり世界に貢献していないといわれていますが、この仕事などは間違いなく世界に誇れる業績だと思えます。

B. 「明治前期日本経済統計解題書誌：富国强兵篇」

ところで、私が働いていた日本経済統計文献センターができたのはこの大川プロジェクトの進行している真最中でした。その設立の動機はこのプロジェクトには関係なく、日本学術会議が出した人文・社会科学の専門文献・史料の図書館を設置して欲しいという勧告に応じて文部省がつくったものです。同様の文献センターは、私どものほかに全国に四ヶ所あります。それまで私は、経済研究所の資料部で社会科学の洋書の収集をやっていたのですが、文献センターができるときに私も文部省のお手伝いをしたものですから、結局できたら研究所資料部からここへ配置換えになって、今度は明治から現在までの日本の経済社会統計資料を集め始めました。そのうちに長期経済統計をやっている先生方から、「僕らは明治初期の統計を探すのに困っているんだから、ぜひ文献センターで集めてほしい」と言われまして、それから私は明治時代の古い統計資料を専門に集め出したんです。

ところが始めてみると、これがまた最初は雲をつかむようでさっぱり見当がつかない。そこでまず初めにお膝許の一橋大学附属図書館の書庫を調べた。それは、統計文献センターができる前に、図書館には所蔵統計資料の蔵書目録があって、調べるのが楽だったからなんです。恐らく一橋大学は、第二次大戦以前の日本の統計資料の所蔵については全国の大学のなかでも一、二を争うのではないのでしょうか。それから次に総理府統計局の図書館に通いました。ここは何といっても明治4年に政表課という統計専門の役所ができ、それが今日の統計局にまでつながっているんですから、明治の古い統計資料については日本一であることはあたり前です。それから国立公文書館の内閣文庫にも、ここにしかないという明治初期の貴重な統計書が結構ありました。まあそんなことを半年位やっているうちに段々明治初期の統計資料の生産、流通、所蔵の状況がわかってきました。

その次にやったことは、ひとつひとつの統計書についての経歴調査です。例えば、現在の『日本統計年鑑』が初めて刊行されたのは明治15年ですが、その前は『統

計要覧』、その前は『日本政表』といひまして、これは明治6年から12年までに主題別に何十冊と出ました。またこれには刊行されなかった印刷直前の原稿もあります。この『日本政表』の経歴調査には苦勞しました。『日本政表』の前の『壬申政表』、これは明治6年に出ましたが調査対象年が5年ですから、あの頃は、まだ年代を干支で呼ぶ習慣があったんでそういう表題にしたんです。『壬申政表』の前は4年を調査対象年とした『辛未政表』が5年に出ました。これが『日本統計年鑑』のルーツです。そんなことで大体見当がつかまりましたので、この調査結果を文献センターから出しました。題名は『明治前期日本経済統計解題書誌——富国强兵篇——』とつけました¹⁾。これは統篇で「殖産興業篇」をつくるつもりで、こうつけたんですが、実はこの統篇はまだつくってありません。

この書物は解題書誌という題名がついていて確かにそうなんですが、実際の内容は統計表の索引です。統計書毎にそこに載っている統計表名を全部書き出して、そのひとつひとつの表の表頭と表側を2桁ずつ並べたんです。なぜそんなことをしたかといいますと、統計を探す人は統計表を探すんであって、統計書を探すわけではないからです。しかし、やってみるとこれはたいへんでした。それでもなんとか全部で5冊出したところで私は停年退職ということになりましたので、先に申し上げましたように統篇はつくれませんでした。こういう仕事は日本経済統計文献センターのような所にいたからできたのであって、学校の外ではちょっと無理です。

ただ、私はこの仕事をやっているうちに、日本人にとってこれまで全く未知の世界であった統計調査という仕事に情熱を傾けた幕末・明治の人たちにとっても興味を持ちました。その中心人物が先程の日本最初の統計年鑑をつくった杉亨二という人物です。この人は大分以前にNHKのテレビ・ドラマで勝海舟をやったときに出てきた海舟塾の塾頭の杉純道と同一人物です。純道を改名して亨二になるのです。この杉さんが、今日お話しするシーボルトと実は一回会っております。この話では後申し上げます。これでやっと本日の演題のシーボルトのつくった統計の話へ少し近づいてきました。そこで話をまたちょっと現代へ移します。

II. 日本の統計の先覚者 杉亨二

今から13年前の昭和55年は日本統計協会の百周年に当たりました。そこで協会はいろいろな記念事業を企画

シーボルトのつくった統計表を求めて

しましたが、そのとき協会会長の森田優三先生（一橋大学の教授時代に総理府統計局長も兼任しておられた）が、私に何か記念事業にふさわしい企画がないだろうかと言われるのです。そのときちょうど私は一橋大学の図書館で、杉さんが統計局（当時は統計院）に在職中、明治16年に私立の共立統計学校という統計調査の専門家を養成する学校をつくり、そこでやった統計学の講義を第1回の入学生の横山雅男という人（この人もその後統計調査事業に一生を捧げた人です）が筆記した講義ノートを4冊見つけたばかりだったのです。見ると、それは16年から18年にかけて杉さんが共立統計学校でやった3つの講義のノートでした。そこでその4冊のノートを森田先生にお見せしたんです。先生は、「杉さんは初代の統計協会の会長だった人だし、この講義は日本における最初の本格的な統計学の講義だから、これは願ってもないものが見つかった」と言われ、早速その講義ノートのうち一番最初の講義を復刻することに決めたのです。このノートの題名は『抄智掎 歴史及理論之部』といます。この奇妙な3個の漢字は杉さんがスタチスチックスの当て字として創作したものなんです。杉さんは、統計というコトバはその頃までは合計という意味で使われていましたから、これを嫌い、片カナでスタチスチックスといっていました。明治8年頃から段々と統計というコトバがスタチスチックスの訳語として普及した後も頑固に片カナでがんばった人です。それで弟子たちが、先生いつまでも片カナではどうですかね、といったところが、それならばこういう漢字はどうかとってつくったのがこの抄智掎という変な当て字なんです。杉さんという人はそういう面白い性格も持っていた人です。まあそういうことでこの復刻版をつくることになりましたが、森田先生から、君が最初にこのノートを見つけたんだから、ということで結局、解題を書くことも押しつけられてしまいました。私は資料屋で統計屋ではありませんから、講義の内容の解題でなく、杉先生の小伝を書きます、ということで引き受けたんです。やってみますと、これがたいへん面白い仕事でした。つまり、蘭学者杉純道が統計学者杉亨二に変身する姿を長崎から順々に追跡することで、日本の近代化のプロセスを統計調査という観点からじっくり眺めることができたんです。そのさわりをちょっとだけ紹介します。

杉さん（これからは杉といいますが）は、文政11年（1828）10月に生まれた長崎の貧乏酒屋の息子です。ちょうどその年の同じ10月にあとでお話するシーボルト

事件がおきています。10歳位の年に相ついで両親を失ない、祖父がやっていた小さな塾のお弟子の世話で長崎の有名な上野舶来店に奉公した。この主人が上野俊之丞とって、もともとは長崎奉行御用時計師ですが、煙硝や更紗、薬の製造に手を広げ、絵も描けば彫金もやるという多芸多才の商人でした。この人が儲けたお金でその頃はとても高価だった蘭書をたくさん買って持っていました。そこで上野の広い家敷にはこの蘭書を目当てに江戸や大坂から蘭学者や、その卵が盛んに入出入りしていたんです。後に杉の蘭学の師となる緒方洪庵や手塚律蔵などはこのときの縁です。洪庵が杉と初めて会ったのは、杉が10歳で上野の店で小僧兼子守りで働いていたときです。このときの赤ん坊がのちに上野写真撮影処を開店した上野彦馬でした。私たちが維新の英雄、坂本竜馬や高杉晋作の写真を見ることができるのは彼らがここで彦馬に写真を撮ってもらったからです。

杉は小さいときから学問好きだったようで、この上野邸に入出入りした蘭学生に可愛がられ、それが縁で大坂へ出て緒方洪庵の適塾に入門することができました。それからいろいろなことがありましたが、ついに江戸へ出て手塚律蔵、村上英俊、杉田成郷塾に学び、自分から売り込んで勝海舟塾の塾頭になったんです。そのうちに幕府が長崎海軍伝習所をつくり、勝が伝習生の手話役として長崎へ行くことになりました。杉は自分の故郷でもあるし、ぜひ伝習生に参加したいと勝に頼んだのですが、そのときは士分でない伝習生になれないのです。そこで海舟は老中阿部正弘（伊勢守）に推薦して杉を阿部の家臣にとりたててもらったのです。阿部は天保改革の失敗で免職された水野忠邦（越前守）の後任として若干25歳で老中になった福山藩主ですが、この人物はときの幕府の難局に当たって多くの人材、川路聖謨とか岩瀬忠震とか、を登用したのです。杉は15人扶持、月2両、蘭書は望むだけ買いわたす、という好条件で阿部家に仕えることになりました。

それから杉は毎日自分の好きな蘭書を読み、伊勢守の質問に応じて世界の情勢を報告しておりました。もともと杉は長崎にいたときは医学が志望でした。しかし、海舟塾を経て阿部家に仕えているうちに、当時政局の中心にあった阿部から日本の現状や将来について話をきき、岩瀬などという秀才と親交を結ぶという幸運に恵まれ、彼の視野が一気に広がったのです。ところが安政4年（1857）阿部は若死してしまつた。杉はその頃はもう一流の蘭学者ですから、幕府の蕃書調所（後の開成所）の

教授手伝に採用されます。この役所は各藩から推薦されてきた学生に洋学を教える教育機関と、外交文書や外国の新聞・雑誌を翻訳して幕府に提供する翻訳局、調査局を兼ねたような機関でした。そこで働いているうちに杉はオランダ語の新聞で初めて統計数字に出会うのです。1860年と61年のオランダの人口統計だったのですが、そこに100人のうち男が何人何分何厘だの、生まれた子が何分何厘だのと書いてある。どうして人が何分何厘になるのだろう、と不思議な気持ちになった。これが杉が統計に興味を持った最初の体験で、多分元治元年か慶応2年の頃と思います。日本における統計学の誕生の第一ページということでは有名な話です。

そのうちに幕府のオランダ留学生西周助(周)と津田眞一郎(眞道)がオランダから帰ってきた。この2人はライデン大学のフィッセルング(Simon Vissering)先生から特別に国家学の講義をうけ、その講義ノートを持ってきたのです。そのなかに統計学のノートがあった。西と津田は正規ではないのですが、外国の社会学者から統計学の講義をきいた最初の日本人でしょう。杉は早速西と津田に話をきき、またこの統計学ノートを借りて翻訳したりして益々統計学に深入りしていきました。

ところが慶応3年、徳川慶喜は大政を奉還し、翌4年3月に江戸城明け渡し、徳川家は、慶喜が引退して家督を田安亀之助(徳川家達)に譲り、70万石の駿河藩に封ぜられることになった。そのため何万という幕臣とその家族が一時に駿府に移ったのです。杉は開成所教授時代に幕臣にとりたてられていますから、もちろん家族を連れて駿河へ移りました。さあ、そこでたくさんの藩士のために住宅問題がおきた。失業者救済問題もおきた。そのためまず駿府の人口、職業、持家などの現状の把握が急務ということになりました。杉はこの頃はもうヨーロッパの統計書を読んで国勢調査の方法なども大体知っていたようです。いよいよ杉の出番です。彼は自分で藩の重役に申し込み、許可をとって手弁で府中、江尻、沼津、原、清水港などの人別調べを始めた。これが日本における最初の人口調査で、明治2年です。この結果、表の一部が残っていますので当時の調査の方法と調査結果の一部がわかります。しかし、この調査は残念ながらそのあとはつづきませんでした。

明治4年に杉は中央政府から出仕の命令を受けて上京し、太政官の政表課長になった。日本の中央統計局の誕生です。これから杉は明治18年に引退するまで15年間、政表課(後の統計院、現在の総理府統計局)の課長とし

て日本の統計調査事業の確立に全力をあげて戦うのです。先に私が紹介した『日本統計年鑑』の前身の『辛未政表』の編集がその第一歩でした。杉の最大の功績はヨーロッパの近代的統計調査手法を最初に輸入し、簡表を使って山梨県(当時の甲斐国)の人口調査を完成したことでしょう。一県ですがこれは立派な国勢調査です。調査対象年は明治12年でしたが、その簡表の整理を終え、報告書として500ページを越す大作『甲斐国現在人別調』が刊行されたのは明治15年です。杉の第二の功績は、統計年鑑や人口調査の企画、設計、調査、編集のために語学のできる若い人材を集め、彼らにうまずに統計学の講義をし、彼らの得意の語学でヨーロッパの統計学の書物を勉強させたことです。当時の政表課は太政官の大学といわれていたそうです。杉が初代会長をした「スタチスチック社」(後の日本統計協会)は杉と弟子たちがつくった会です。

しかし、彼の統計調査にもとづく統計の作成という考え方は、いまでは当たり前ですが、当時の官庁ではなかなか認められなかったのです。明治14年に大隈重信が統計課を改組して統計院をつくったのですが、そのときに一番の統計専門家の杉は何の相談もうけず、できた統計院でも冷遇されたのです。この裏には長い間の大隈と杉の対立のいろいろな話がありますが今日は省略します。ちょうどその頃から杉は眼を悪くします。そのため彼は明治18年12月に太政官制度が内閣制度に替わり、統計院が内閣統計局となった機会に統計院を退職します。そのあと、彼は官界には戻らず民間で統計調査思想の普及のために弟子たちと働くのです。しかし彼が念願とした国勢調査は政府の無理解のため生前にはとうとう実施されなかった。国勢調査が施行されたのは大正9年です。ただし、この予算が大正9年の12月の国会で通過したことを臨終の床で横山からきいて亡くなったのが、この統計の先覚者に対する何よりの朗報でありました。

III. シーボルトと日本の統計

A. シーボルトの統計学教育

ようやく本論に入ります。一体この杉とシーボルトはどういう関係があったのでしょうか。まずこの疑問に答えなければなりません。私は大分以前に東洋経済新報社の『統計調査月報』という雑誌に「日本統計事始一物語、わが国近代統計の成立」という随筆を連載したことがあります。編集者の注文は、統計数字ばかりのこの雑誌の

シーボルトのつくった統計表を求めて

利用者である会社の調査マンのために、わが国の近代統計の草創期の歴史を物語風にまとめて欲しいということでした。そこで私は、杉亨二を中心に、そのあとは明治17年に『興業意見』という大きな農村調査報告をまとめた前田正名や、未完に終わった『皇国地誌』という全国地誌の編纂を企画、指揮をした塚本明毅などをとりあげて列伝体風にまとめてみようと思ったのです。そこで始める前にもう一度考えてみました。つまり、杉さんから始めてよいただろうかということです。そのときに、いやそうではない、杉の前にぜひとりあげる人物がいる、それはシーボルトだ、と教えてくれた人がいた。『日本統計文化史序説』(1972)の著者小島勝治さんです。残念ながらこの人はこの本が出るずっと以前、昭和19年に30歳で中支方面で戦病死しました。

小島さんは出征迄は布施市(今の東大阪市)の統計職員でした。彼はたいへんな勉強家で、勤務の余暇に日本人の統計思想や統計調査の歴史を、自分が編集している布施市の統計雑誌『浪華の鏡』に連載していました。これが彼の死によって中断していたのを、戦後になって友人の努力で1冊の本にまとめられたのが先の本なのです。ですからこの本は古代から始まって徳川期で終わっています。しかし、私はこの本を読んでその構想の雄大さと資料収集の綿密さに驚きました。そしてこの本の編集者松野竹雄さんの解題を読み、小島さんは、この統計文化史をさらに明治期以降まで続ける予定で、西洋統計思想移植史と明治統計文化史の構想を持っていたこと、その大体の構成も知ることができました。また彼の論文や随筆の大部分が掲載された『浪華の鏡』という雑誌を探して、そこに「シーボルトと幕末統計文化」という論文を見つけて読みました⁽²⁾。これで私は杉の前にシーボルトをとりあげることに決めたのです。以下、小島論文をざっと紹介します。

徳川幕府時代に唯一つヨーロッパの貿易相手国として長崎の出島に和蘭商館を設けていたオランダは、19世紀に入って本国の力が衰えてきた。そこでこの際日本との貿易を再検討しようということになり、そのため日本の政治・経済の総合的調査を開始しようと考えていた。そこへ日本に非常に興味を持っていたシーボルトが応募してきたので、彼にこの大役を果たさせようと送りこんできた。シーボルトはオランダ人の医者ということで出島に到着、やがて出島から長崎の町外れの鳴瀧という所に塾を開いた。シーボルトは全国から集まってきた弟子に鳴瀧塾で熱心に教育をした。彼の教育法で特異なのは、

弟子の一人一人にテーマをあたえて質問をし、そのテーマについての研究成果をオランダ語でまとめてさせていることである。そのなかのいくつかは統計数値に関する質問と回答がある。

例えば高弟の高良齋が書いた「生理問題」という表題をつけた半紙十丁程の小さい手稿が高の子孫の家に残っているが、それを見ると次のような質問と回答がある。

質問：日本人は男子と女子とどちらが多く生まれるか、その割合はどれほどか、ヨーロッパでは男子20人に対して女子21人の割合だが、日本では女子の方がやや多いのではないかと思う。

回答：よくわからないが、ヨーロッパにおけるよりも女子が多く生まれるようである。

質問：日本では1年間に100人中何人死亡するか、ヨーロッパでは23人に1人死亡する。日本ではこれより少ないと考えられる。

回答：日本では22人に1人の割合で死ぬからヨーロッパよりも多く死ぬと考えられる。

質問：日本の男女の平均年齢は何歳か。日本のどこに長寿の人がいるか。

またもう一冊の高家に保存してある手稿は「日本疾病志——日本に現われる注目に価するすべての病の短い目録並びに記載」という表題をもち、内容は、第1部が小児病、第2部が成人病で、これを分類して叙述し、成人病のうち花柳病を第一とし、百人中高々15人がこの病気から免れている位のものである、と述べている。これらの史料をみると、シーボルトは医学を単に病人の脈をとるという治療の立場からとらえるだけでなく、もっと高い立場から人間の病気を見降ろそうとしている。これは日本の社会医学のごく素朴な形の現れである。シーボルトが一人の病人の脈をみるのではなく、社会に基礎をもつ病気をみようとしたことは、結局病気の集団的な特質をみるという方向へ向かっていくことになるわけで、ここから病気を統計的に観察するという方法が生まれる。シーボルトが日本人の平均年齢やどこに長寿者がいるかという質問をしているのは、健康と環境との関係を問題にしようとしたのではないか。

しかし、このようなシーボルトのすべての質問は、これまで日本の学者が夢想もしなかった質問である。ことに統計的観察の素養もなく訓練もされていないこの国の学生に向かって彼の発した質問は賢明な尋ねかたとはいえない。だからこれに対する答えも彼の誘導質問にそのまま引きずられて何の根拠もない数字を並べるだけであ

った。それでも学生は、シーボルトの質問によってそのような問題があるということを、正確にはなくてもある程度は理解したのである。またシーボルトは鳴瀧塾の講義では、このような問題をさらにいくつもとりあげていた筈であるから、弟子たちはシーボルトによって統計的なものの見方への開眼をしたと推定しても誤りはないだろう。

もうひとつの証拠をあげよう。シーボルトの大作『日本』のなかに「1826年の江戸参府紀行」という章がある。これによると、1826年2月15日（文政9年1月9日）、出島の商館長ドゥ・ステュルレル大佐を公使とする江戸参府旅行の出発に参加したシーボルトが、途中一行の泊った下関で弟子の河野コサキという医師から「長門および周防国の地理的・統計的記述」という論文をうけとっている。この論文自身が現在見つからないのは残念だが、この統計的記述というコトバは、シーボルトが鳴瀧塾で学生に社会の統計的な観察をも教えていたことを推測させる。シーボルトは決して統計学者ではないが、ヨーロッパでは医学者などの自然科学を専門とする学者にはこの程度の統計的知識は常識となるくらいに統計学は進んでいたのである。

彼が弟子に宿題をあたえて提出させた論文のいくつかは、現在残っている。彼はこれらの論文を“Nippon”に随所にとり入れた。また彼自身も出島の商館の資料を使って日本の研究を精力的に進めていた。そのなかでもっとも興味のある史料は、戦前のベルリンにあった日本学会所蔵のシーボルト文献のひとつ「日本の貿易」というファイルである。これは彼が商館にあった書類から写しとったいくつかの統計表であり、そのなかには「1820（文政3年）より1823年（文政6年）に至る4年間の日本貿易収支決算対照表」、「日本国の国民生産の各部門の検討」などの興味深い統計表がある。彼はこれらの統計表を転写または編集して当時の封建日本の政治・経済・社会の現状を把握しようとしていたのである。

以上の残された僅かな史料によってもうかがえるように、日本の洋学史、医学史上不滅の光を放っているシーボルトは日本統計学史上でも逸することができない功績を残していたのである。ところがこのシーボルトの努力は統計的思考の開拓という点では結局実を結ばなかった。その理由は、第一にシーボルトの弟子たちは学問的には力はあっても政治的には無力であったこと、もっと根柢的な原因は、時の国内一般の政治社会情勢が未熟であって、統計的研究の目的が理解されなかったためであ

る。

以上が小島さんの「シーボルトと幕末統計文化」の要旨です。私はこの論文を読んで、すぐに日本統計事始の第一ページはシーボルトから始めようと思えました。それで『東洋経済統計月報』の「日本統計事始」の連載の第一回を、「シーボルトと『日本』」という表題にしたんです。それからとりあえず、手持ちの資料だけで原稿の方は仕上げました。そのとき一番嬉しかったのは、杉がシーボルトにたった一度ですが、会っているのを発見したことです。それはシーボルトが2回目の滞日中のときです。芝の増上寺の裏手に幕府がつくった赤羽根接遇所という外人客の宿泊施設があって、シーボルトはここに泊っていたんです。彼は2年前に長崎にきてオランダ貿易会社の仕事をしていたんですが契約が解除になり、この年、文久元年（1861）には幕府の外交顧問のような仕事をしていました。午前中は幕府の役人の相談をうけたり、蘭学者に講義をしたり質問をうけたりした。

しかし、江戸の蘭学者の水準はこのときはもう鳴瀧塾の学生とは全く違っていたんです。伊東玄朴、戸塚静海、桂川甫周らのそうそうたる蘭学者の質問にシーボルトはしばしば立往生して彼らを失望させたといえます。こういう学者のなかに蕃書調所に加藤弘蔵（後の東大総長の加藤弘正）もいたのです。初夏のある一日、加藤は杉亭二ら蕃書調所の同僚と一緒にシーボルトを訪ねた。残念ながらこのときにどういふ話をしたかという記録は残っていません。ただ、加藤の感想が残っている。加藤は、「シーボルトは本草学と医術しか知らないのに何でも知っているような振りをする山師だ。また日本人が西洋人といえは何でも知っていると言信していろいろなことを質問している。余も国法学や航海のことを質問してみたが、満足な応答がなかったのはもちろんである。西洋人の言うことだからと何でもかきこまってきたりなどは笑止のいたりだ。」と、悪意に満ちた文章を残しています。ここには鳴瀧塾の熱心な弟子たち、美馬順三、岡研介、高野長英、高良斎、二宮敬作たちがシーボルトからなんでも吸収しようとしたあの師弟関係はもはやありません。30年の歳月をつくづく感じさせます。ところで、このときに杉とシーボルトとの間に統計の話は出たでしょうか。私は、この想像は楽しいのですがちょっと無理だと思います。というのは文久元年という年は、恐らく杉がオランダの統計数字に接する前だからです。それにしても杉がシーボルトに一度でも会っているという事実は、シーボルトのつくった統計を探そうという私の意欲をか

きたてたことは間違いありません。さてどこから手をつけていいのか、まず河野コサキという医師の論文の行方です。コサキというのは、萩藩の家老に仕え防府の宮市に住んでいた河野厚伯という人物らしいのです。高野長英とかおかの弟子の論文は結構残っているのに河野の論文がどうして見つからないのか。

B. 日本追放と“Nippon”の刊行

例のシーボルト事件の発端は、彼が幕府の天文方、書物奉行高橋作左衛門景保から入手した当時国禁の日本地図が、たまたま帰国のために荷づくりして船に積んで出港の直前に台風に遭って壊れた箱のなかから役人に見つけられたということですが、実はそれ以前に幕府は高橋景保を、禁制品をシーボルトに渡したという疑いで内偵していたんです。この当時オランダ人は入国するときには荷物を検査されますが出国のときは検査はないのです。だからシーボルトの荷物が調べられたのは、たまたま台風があったためと、高橋に疑いがかかっていたためです。結局高橋は台風があった8月10日からちょうど2ヶ月後の10月10日に逮捕されて連日訊問をうけ、シーボルトも11月10日から家宅捜索をうけ訊問されるのです。この訊問は断続的に翌文政12年まで続きます。その間に2月16日高橋は牢死し、シーボルトは8月まで訊問をうけ、収集した資料やほかの所持品を押収され、9月25日に追放の処分をうけて12月5日に日本を去りました。

このときシーボルトの所持品はほとんど没収されたかという点と実はそうではないんです。彼は訊問があるということを通詞の吉雄忠次郎から知らせをうけて、大急ぎで大事な蝦夷・千島の地図を徹夜で写したり、そのほかの地図や、書物、写本なども箱に入れ、商館長に頼んで商館の倉庫に隠したんです。この荷物は結局没収されず無事オランダに届きました。また訊問以前にすでにオランダへ送ったものもたくさんあります。こういう資料が“Nippon”に使われているわけです。そのなかに高橋の作成した「日本辺界略図」があります。この地図は伊能忠敬の作成した日本地図を土台にして、さらに高橋が、その頃ヨーロッパの地図学者や航海者の間で論争があったカラフトとサハリンが同一であるかどうかという問題に対して同一であることを地図に現してこの問題に終止符をうち、またアジア大陸との間に海峡(間宮海峡)があることを示した貴重なものでした。そういうわけでシーボルトは結局、動物の剥製標本や植物の種子や腊葉

のほかに大量の資料をヨーロッパへ持ち帰ることができたんです。その種類と量の多いことは驚くほどです。その一端は今年の6月から7月にかけて東京国立博物館で開かれた「シーボルトと日本」という展覧会でご覧になった方もあると思います。

シーボルトは一先オランダに帰り、ライデン市に家を買って、そこで持って帰ったたくさんの日本関係の資料の整理を始め、その一部を日本博物館に改造して一般公開しました。全部で8,000点を越える資料だったそうですからたいへんなものですね。それからいよいよ日本に関する百科全書的な著作“Nippon”の刊行の仕事にとりかかるとのことです。この書物は1832年から分冊で刊行され、1852年までに20分冊を13回にわけて配本されたが、遂に彼は力尽きてそのあとは出ていません。この書物のそのあとの運命も複雑で、書誌学的に天下の奇書といわれる値うちが十分あります。この話をするとまたきりがありますが、いまは戦後に出た“Nippon”の翻訳の刊行を機会に発表された藤田喜六さんの書誌学的な検討の報告から、今日の話に関係する所だけを申しあげます⁽⁴⁾。

藤田さんは内外の図書館12館に所蔵されている15点の“Nippon”を調査したそうです。その結果驚いたことにそれらの15点が、装丁、冊数、本文ページ、内容の編別構成、図版の数、図版がカラーか単色かなど、どこかが違って、全く同じものはひとつもなかったそうです。分冊をまとめた単行本の初版はシーボルト自身が編集して1852年にライプチヒのフライシャー社から出したものが2種類あります。これは本文は4折本6巻で同じですが、図版が違います。ひとつはカラーでもうひとつは白黒です。次にロンドンのバーナード・クォリッチ社が出したクォリッチ版がある。この本は、版年が1852年と印刷されていますが、実際は1869年だそうです。古版本にはこういうことはよくありますね。この本の特色はコレクションのあることと、新たに標題紙のついたことです。それから第3番目にシーボルトの生誕百年記念の1897年に彼の子息のアレクサンダーとハインリヒが編集して出したものがあります。この本は初版より判型も小さく、若干省略もありますが、この本の特色はシーボルトが初版で書き残した箇所を、その後子孫の家にあった原稿から補充したことです。次に1930年から31年にかけてトラウツ版というのが刊行された。これは当時ベルリンにあった日本学会が入手したオーストリアのハプスブルグ家旧蔵の初版本を使い、トラウツ

(Dr. F. M. Trautz) が増補したもので、本文に通しページ、図版にも通しナンバーをつけ、索引もつけて非常に利用し易くなりました。トラウトという人は日本学会の主事で、ベルリン民俗博物館長のミュラー (F. B. Müller) の弟子でした。戦後になって日本の日蘭学会が編集して講談社から 1975 年に出版されたものがあります。これは初版本やトラウト校訂版などを使って編集したものです。最後に翻訳本ですが、これはオランダ語訳 (1832 年刊) は第 1 分冊のみ、フランス訳 (1838 年刊) 英訳も 19 世紀に 3 種類あるがどれも不完全です。しかし、幸いなことに最近講談社版の原書の翻訳が完成して雄松堂から刊行されたので、私たちはようやく原書と翻訳本でこの大作の全貌をつかむことができるようになりました。

IV. シーボルト「日蘭貿易史関係統計表」 を求めて

A. ベルリン日本学会所蔵シーボルト文献の行方

ところでこの“Nippon”の第六部は「農業、工芸と貿易」(翻訳では「日本の貿易と経済」)となっていて、内容は日本研究の大先輩であるケンペルとかチチングの書物や、シーボルトが出島の商館で収集した史料を使って日本とオランダとの通商史を書き、次に日本の資源や産業や商業のことを書いているのです。そして最後に貿易史に関する資料や統計を発表する予定だと書いているんです。それから貿易史の本文そのものも途中で切れています。一部は息子が残された原稿で埋めましたが、まだ不完全なんです。そうするとこの未完の部分の原稿や統計表はどこにあるんだろうかという問題が出てきます。これについては、一応見当はついていました。それは、小島勝治が「シーボルトと幕末統計文化」を書くときに使った書物である『シーボルト研究』(日独文化協会編、岩波書店、1938 年)は、1934 年に日独文化協会がベルリンの日本学会所蔵のシーボルト文献を借りてシーボルト資料展覧会を上野の科学博物館でやったんです。そのときにコピーをとり、入沢達吉博士が委員長となって当時の東京帝大のなかにシーボルト文献研究室を設けて研究した結果の報告書なんです。このときシーボルトの弟子の高野長英などの論文も復刻されました。この『シーボルト研究』のなかの板沢武雄博士が書いた「シーボルトの第一回渡来の使命と彼の日本研究特に日蘭貿易の検討について」という論文をみますと、シーボルト

は日本滞在中に、龍大出島の商館の文書から要点を逃さず正確に日蘭貿易史関係の史料と統計表を抄録したことがよく書かれています。またその統計表自身も何点か載っています。小島が論文中に採用したのは、この板沢論文からとったものです。しかし、この論文では史料も統計表も一部だけですし、統計表を使った日蘭貿易の検討はやっておりません。

そうすると、1924 年に日独文化協会が借りてコピーをとったものの資料の所在をつきとめてその現物にあたる作業をどうしてもやらなくてはならない。それと 1934 年にとったコピーがどこにあるか、これをつきとめて両者をつき合わせる作業もやらなくてはならないということになります。東京のコピーについては私は、法政大学のシーボルト研究会の幹事をしている大森実先生にうかがいまして、東洋文庫にあることがわかりました。そこでとにかくドイツへ行く前に東洋文庫へ行って調べてみました。ところがいろいろ文庫の人にも手伝ってもらったんですが、結局探している日本の貿易に関する資料は全部写真版にとってなくて一部だけでした。ここにそのコピーをもってきましたが、その頃は字の方が白く出る方式なんです。別に読みにくくはないんですが、よくみると右の方の端が欠けているページなんか何枚かあります。そうするとこれはやはり、ドイツにある現物を調べるしかない。ドイツのどこにあるかということは、戦後になって洋学史研究の大家である沼田次郎先生の報告によって西独のポッフム市にあるルール大学が所蔵していることがわかりました⁽⁴⁾。

そのいきさつをちょっと申しあげます。日本学会がもっていたシーボルト文献は、1927 年にトラウト博士の世話で、シーボルトの長男アレクサンドルの長女エリカさんから購入したものです。日本へ貸し出したのち第 2 次大戦が始まって 1944 年にチューリッゲンに疎開したところが、第 2 次大戦の終戦後ソヴェート軍とアメリカ軍が 2 つにわけて接収してしまった。アメリカ軍の接収した分はその後マールブルクにあった西ドイツ図書館に返され、それからさらにルール大学の東アジア研究所に移された。このことはこの研究所と東大との間に教授の交流プログラムがあって、1974 年にルール大学に客員教授として行かれた東大教養学部の高田東朔先生のおかげでわかったんです。高田先生もこの文献を調べたんですが、この研究所が引越しをしたため調査ができなくなり、沼田先生が 1975 年にこの研究所へ行かれて調査をしたんです。その結果、大体次のようなことがわかりま

した。1) 日本の門人からシーボルトに提出したオランダ語で書いた報告はほとんど残っている。2) シーボルトが集めた欧文や日本語の資料とシーボルト宛の手紙ももとの通り残っている。3) 日記や手帳は、第2回渡航のときは比較的よく残っているが、第1回のはほとんどない。4) “Nippon”のために書いた原稿は残っているが、それ程多くはない。5) 1934年に日本に貸し出されるときにあった多くの地図はほとんど残っていない。それで最後に仮目録があります。そこに日本の地誌と貿易に関する次のような資料の名前があったんです。

No. 165 Statistik von Japan 1. (Skizze einer politischen Geographie von Japan): II.

No. 166 Japansche Handel 1.

No. 167 Japansche Handel 2.

B. 西ドイツ中央図書館とルール大学東アジア研究所の調査

これでどうやら探している資料の存在がはっきりしてきました。あとはルール大学へ行くだけです。その前にソ連軍が接収した資料はどうなったかということをおよそ報告しておきます。話が前後しますが、私は昨年ほかの用事でライデン大学の日韓研究所を訪ねてこの所長のポート(W. J. Boot)先生に会って話をしていたときに、たまたまシーボルト文献の話が出て、先生はソ連軍が接収した部分は確かレンングラードのどこかの図書館にあるんじゃないの、と言っていました。これ以上くわしくきかなかったのは、いまになってみるとちょっと残念です。そこで話が元へ戻りますが、ポッフム大学の東アジア研究所長のデトマー(Hans A. Dettmer)先生は、東大へ交換教授として今年の夏きておまして、そのときお世話をした国際文化会館の図書館の東ヶ崎民代さんをお願いして手紙を書いてもらいました。またルール大学へ渡す前に所蔵していた西ドイツ図書館が西ベルリン市へ大きな図書館を建てて越しましたが、そこにルール大学へ移ったシーボルト文献のマイクロ・フィルムがあるのです。正式の名称はStaatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz Berlin(プロシャ文化財団付属国立図書館)といいます。これは西ドイツの中央図書館です。ついでに申しあげますと、東ドイツの国立図書館は東独の東ベルリン市にあります。これが第二次大戦前のドイツの中央図書館で、連合軍の空襲で大損害をうけましたが、いまは修理の跡がわからない程元のとおりになりま

した。ここには私の先生の大家金之助先生が集めた日本の社会経済思想史のコレクションが先生から生前に寄贈され、「大家文庫」として利用されています。ですから西ドイツの国立図書館は全くの新築です。この東アジア部門の主任のクレムピーン(Rainer Krempien)さんにも東ヶ崎さんから紹介してもらいました。

それから9月の始めに日本を発ってウェールズをイギリスの友人の案内で5日程廻って、9月14日からのロンドンで開かれている「日本研究資料集會」(Colloquium on Resources for Japanese Studies)の第一日目の集會に出ました。この会は、ブリティッシュ・ライブラリー(B. L.)の主催で、会場はロンドン大学のソアス SOAS (School of Oriental and African Studies)の講堂でしたが、この会に出た私の最大の目的は、実は先程の西ドイツの中央図書館のクレムピーンさんと、もう1人その部のドレスラー(H. Dressler)さんという女性が出席しているからなんです。その日は慶応の図書館・情報学科出身(第22期)のイズミ・タイトラー夫人(旧姓 梶田泉)の報告をきいたり、弥吉光長さんと反町茂雄さんにお会いしたりしました。タイトラーさんは、今はオクスフォード大学のボードリー図書館(Bodleian Library)で日本語の書物の収集をやっています。弥吉さんは、この8月に88歳の米寿のお祝いをやったばかり、反町さんも80歳を越していますが、お2人ともとてもお元気ででした。反町さんは奥さんと若い人がついていたのですが、弥吉さんはおひとりでした。私も70歳を越しましたが、これでは私などはまだまだ若いんだと本当に感心しました。このお2人は特別講演をされました。その夜はB. L.のキングス・ライブラリーという立派な部屋でレセプションがあり、そこで私はドレスラーさんに会って22日の訪問の予約をとりました。

それから私は、15日はライブチヒで関西学院大学の早島英先生にお会いするために東ドイツへ行きましたので研究集會は欠席し、東ドイツを廻って22日に西ベルリンに着き、その日の午後中央図書館へ参りました。カラヤンのベルリン・フィルの音楽堂のすぐ手前の運河沿いの広大な建物でした。時間がなかったので用事だけすませ、内部をゆっくり見学することができなくて残念でしたが、大きなゆったりした空間を持ったとても機能的にできている図書館でした。東アジア部にいきますと、クレムピーンさんが日本人の男の館員と一緒に待っていてくれました。ドレスラーさんは生憎用事で外出中だったので残念でした。早速クレムピーンさんと一緒にシーボルト

ト文献のうちからお目当ての箇所を一所懸命探しました。ところがなかなか見つからない。マイクロは忠実に文書のファイルをコピーしておりまして、白紙までとってあるのです。ところが文書の順番どおりに入っていないのです。それで2時間位悪戦苦闘して何とか20表位の統計表を探ることができました。ここに持ってきましたが、文章と統計表と混じっていて、統計表にも下に注なんかがついている。一番初めの表だけ読みますと、「1820～1828年の長崎市の統計的概観」と書いてあって、人口数、住宅数、生没人口数などが載っている。また全国の国別水田面積と生産石高統計表もありました。これは先程の板沢論文に載っています。しかし、論文に載っていないものもあった。そこで私はルール大学に行ってこの現物を確認し、そのあとでこちらのマイクロ・フィルムからコピーをとってもらうことをクレムピンさんをお願いして別かれました。

それから今度はルール大学に翌日きました。西ベルリンのテゲル飛行場からデュッセルドルフの飛行場まで飛び、そこで先程の早島先生の友人のシュヴェントカー(W. Schwentker)さんに出迎えてもらいました。この方は、デュッセルドルフ大学の歴史学教授、マックス・ヴェーバー全集の編纂者の一人のモムゼン教授の弟子で、ヴェーバー全集の手伝いをやっている若い、といっても30代後半位の人です。面白いことに日本のヴェーバー研究の状況を来年日本に行って勉強したい、そのためにルール大学の東アジア研究所でいま日本語の勉強をしているんだと言っていました。その割にはあまり日本語はうまくなかったんですが、とにかくこれには驚いて、何でそんなことをするの、と言ったら、いや先生こそなんでそんな質問をするんですか、いまヴェーバー全集の購読者は日本が一番多いんですよ、とに角私は来年は何とかして日本に行きます、というんです。私は、日本語でヴェーバー研究書を読むのはたいへんですよ、と言ったんですが、そんなことを話ししているうちに1時間程でルール大学に着きました。

C. 「ルール大学シーボルト・コレクション蔵書目録」

この大学は、シュヴェントカーさんにきくと、西ドイツでも5本の指に入る大学で、学生の数は5万人以上いるそうです。大きな図書館へ入りまして、さんざん探して二階の一番隅の部屋をやっと見つめました。入ると、中年の小柄の女性が待っていて、デットマー所長は今日ほかの用事でこられまいので私がお相手しますというこ

とでした。この方はヴェラ・シュミット(Vera Schmidt)さんといってシーボルト文献の整理を専門にやっている嘱託の方で、ライブラリアンでなく研究者のようでした。デットマーさんから話を全部聞いていて、あなたの見たいのはこれでしょうと言って何束かのファイルを見せてくれました。ついに、念願の「日本の貿易」と「日本の政治地理の概要」が目の前に現れたというわけです。それからヴェラさんは、「私はこのシーボルト文献の目録をずっとつくっていたんですよ。ようやく原稿ができて印刷所に入れたところです」と言ってその原稿のコピーを見せてくれました。これをバラバラめくって私は本当に驚いた。ほとんど完璧な目録なんです。記述目録の模範です。最初の数ページだけコピーをもらってききましたが、これがそうです。タイトルは“Die Sieboldiana-Sammlung der Ruhr-Universität Bochum”, つまり『ポッフム・ルール大学のシーボルト・コレクション』です⁽⁶⁾。刊行予定は1989年で、シュミットさんは5月頃を予定していると言っていました。記述項目はまず第一に保管記号、それから保管形態、文書の種類、これはノートとか論文とかいう区別です。それから著者、例えば筆跡でシーボルトと確実にわかったばあいでも先ずanon.と書き、次にPhilipp Franz von Sieboldを鍵カッコに入れている。次に表題、これに目次がついている場合は目次を出している。例えば私が探していたSkizze einer politischen Geographie von Japanは目次があり、第一部は1. 言語, 2. 宗教, 3. 政体などの10章, 第2部は11. 人口, 12. 財政収入, 13. 各大名侯国の生産高の統計表による概観, などから始まる24章の目次がある。それからAusarbeitungsgrad, これは何と訳しますか、その文書の仕上がりの程度ということでしょうか、例えば、これは“Nippon”の第6部第2章の「当初から現在迄のオランダと日本との貿易」のための下仕事の草稿である、とかこういうことが書いてあるんです。こんな具合ですべての文書にこのような注があるから、このコレクションのなかの文書と“Nippon”との関係は全部わかるわけです。次に書かれた年月日, 書かれた場所(出島とかバタヴィアとか), 使用言語(ラテン語, ドイツ語, フランス語, オランダ語, 日本語は漢字とか片カナとか), 書体, 使用した紙の種類(手漉和紙, 洋紙), 紙のウォーター・マークの種類, 紙のサイズ, ページ数(文書は非常に白紙が多い, そのときは何ページから何ページ迄は白紙と書いてある, また新聞の切り抜きも何ページから何ページにわたって貼

りつけてある、ということも書いてある)、使用した筆記具とその色なども、セピアとかブルーとか書いてある。それから装丁はどういう風になっているとか、文書の由来、例えば前にベルリンの日本研究所が所蔵してその蔵書印があれば、それも書いてあります。

とにかくたいへんなものです。とくに文書の仕上げの程度の所などは、“Nippon”の刊行書の諸版本や、それと材料となったルール大学所蔵以外のほかに残っているシーボルト文書も知らなければできないでしょう。これはもう学術研究そのものでもありますね。それから私はこの目録と、前から手紙でお願いしてあった文書の原物を並べて4時間ばかりシュミットさんの部屋でチェックをしました。彼女は目の前で本かなんか読んで待っていてくれて、わからないところはじかに聞けますので大助かりでした。その結果、大体的見当をつけることができました。つまり *Skizze einer politischen Geographie von Japan* は2分冊になっていて、その背表紙にそれぞれ *Statistik von Japan I*, *Statistik von Japan II* と書いてあったのです。それから *Japansche Handel* も2分冊になっていた。そして東洋文庫にある複写はこの全体のうちのほんの少しであることがわかりました。統計表も西ベルリンの中央図書館のマイクロを廻したときよりさらに数表多く見つかった。そこであとはコピーをとるだけです。ところがこのシーボルト・コレクションの現物からコピーをとるには書面を出して許可を待たなければならないのです。シュミットさんもそれでは時間がかかるし、代金の支払い手続きも面倒だから西ベルリンの中央図書館のコピーからとった方が簡単だということです。そこでそうすることにしてシュミットさんにお礼を言って別されました。ところがその後予定がちょっと狂い、西ベルリンへ寄る時間がどうしてもとれず、東京へ帰ってから改めて手紙で頼み、いまその到着を待っているところです。

V. その他のシーボルト・コレクションの行方

ところでこのマイクロが届いたら、私はこれをまた普通の紙に戻して、徳川時代の経済史の専門家にその資料的価値を判定してもらおうと思っています。幸い、この頃は数量経済史的手法で徳川時代をとりあげる学者が出てまいりました。一橋大学の梅村又次さんとか尾高煌之助さん、斎藤修さん、尾高さんも斉藤さんもこちら慶応大学の経済学部出身です。慶応大学にも西川俊作先生

がいらっしゃいます。それから日蘭交渉史や貿易の専門家では慶応大の田代和生先生、東大の永積洋子先生とか若手では青山学院大学の大学院の石田千尋さんとか、いろいろな方がいますから楽しみです。私は徳川時代の経済史の専門家でも日蘭交渉史の専門家でもありませんが、もしこの統計表を含むシーボルトの未発表の手稿のなかに、これ迄研究者に知られていなかった統計表があればそれは貴重な研究資料となるでしょうし、また統計表がほとんど研究者には知られているものだったとしても、このような研究方法をとって日本の社会経済構造をつかもうとしたシーボルトに社会科学の側面から光があたり得るのではないかと思います。

そういうことになりますと、次に問題になるのはシーボルトの残した文書はこのルール大学のコレクションだけではないということです。これがまたヨーロッパの各国、アジアに迄散らばっていて、この話をするとたいへんです。今日は最後に最近国立国会図書館の田邊由太郎さんがヨーロッパを歩いてシーボルト・コレクションの現状を調べました結果の報告と、シーボルト家の一族の一人のハンス・ケルナー (Hans Körner) さんが書いた『シーボルト父子伝』によってその状況を簡単に報告します⁽⁶⁾。

まずシーボルトが集めて自宅で公開していた資料は、その後1837年にオランダ政府が買いとって、今はライデン国立民族博物館にあります。このキュレーターをしている人は、Ken Vos さんといって私も博物館でお会いして名刺をもらってみたら、賢・フォスと書いてありました。日本語を日本人と同じ位に話す方です。それもその筈で、お父さんが博物館の隣にあるライデン大学の日韓研究所の所長を長くやっていた有名な日本研究家なんです。このコレクションのなかの文献やドキュメントの3分の2はライデン大学に移管され、今は図書館の東洋写本部にあります。この両館の日本語文献の合同目録は昔(1896年)書店のE. J. Brill が作成したものが 있습니다。それからシーボルトがパリの国立図書館(B. N.)に1843年に売った本が同館の東洋写本部にある。34件89冊で、この目録は田邊さんがとりあえずとって先の報告のなかに載っています。このB. N. でちょっと思い出したのですが、ここにはシーボルトが第一回滞日中のオランダ商館長ステュルレル(J. W. de Sturler)が東洋で集めたコレクションが、パリで彼が死んだ後にB. N.に入っているんです。そのなかに高橋景保がステュルレルの江戸参府のとき彼に贈った自作の『新

訂万国全図』があるのは注目に値します⁽⁷⁾。

ハーグの国立文書館にもシーボルト文書が保管されています。ここは私も行ったことがありません。まだくわしい調査報告もなさそうですが、ここにはシーボルトの日本に関する地理学研究関係の文書があるらしいのです。それからミュンヘンにあるバイエルン国立図書館には、シーボルトの『日本植物誌』の協力者であったミュンヘン大学植物学教授 ツッカーニ (J. G. Zuccarini) にあてた手紙が 70 通ほどあります。シーボルトが集めた日本の植物の種子はライデン大学の植物園に立派に生長しています。また腊葉はライデン大学の国立腊葉館に保管されています。最後にシーボルトの報告が、パタピヤ文書館にもあります。パタピヤはいまのジャカルタです。彼は第一回渡航の途中ここに滞在し、蘭領東インド総督ファン・デル・カペルン男爵の熱烈な応援をもらって、日本に関するあらゆる文献を集めたのです。ここにある報告はカペルン総督あてでしょう。

次にシーボルトが亡くなったあと、彼が集めた文献や資料はどうなったのでしょうか。まずシーボルトが第二回の日本滞在中に持っていた原稿と書物の一部は、帰国するときに長崎においてあったんですが、彼の死後、遺言によって 1873 年に東京に新設された独逸東亜細亜研究協会に委託された、とケルナーの『シーボルト父子伝』に書いてあります。この行方がどうなったか、残念ながら私は勉強してきませんでした。次にヨーロッパへ渡った本と文書のうち、本は未亡人が本屋に整理を頼んだんですが、これがとんでもない悪い商人で、結局勝手に処分したため行方はわかりません。このためこの本屋は逮捕されて 5 ヶ月の懲役刑をうけました。全く残念でした。ただし、息子のアレクサンダーが大英博物館に売った本はいまのブリティッシュ・ライブラリーの東洋写本刊本部にあります。1,088 件、3,441 冊で、そのうち 43 件 199 冊が第一次滞日時代に集めたもので、あとは第二次滞日時代に集めたものだそうです。このコレクションについては、先に話しをした「日本研究資料集会」の世話をした B. L. の東洋写本刊本部の deputy keeper の Yu-Yin Brown 女史の調査報告があります。しかし、目録はまだないんです。この人の前任者の有名なガードナー (K. B. Gardner) さんに B. L. のレセプションで会ったときにきいてみたんですが、B. L. にはもうひとつ有名な薩道文庫という幕末明治初期に活躍したアーネスト・サトウ (Earnest Satow) の集めた日本語書籍のコレクションがあって、この方が書物としては遙かに筋の通

った善本が揃っている。目録の作成はこの方が先で、今私が囑託としてやっているんです、と言っていました。ですからシーボルト文庫の目録は相当あとになるようです。

最後になりますが、もう 2 件だけシーボルト資料の大事なコレクションがあります。ひとつは、長女ヘレーネ (Helene) の持っていたものです。これは彼女の夫のお城であるバーデン＝ヴュルテムベルク州のウルム市の近在のエルバッハ城にあるそうです。これについては私はよくわかりません。何れ調べてみようと思っています。もうひとつは、2 女のマティルデ (Mathilde) が持っていたものですが、彼女がグスタフ・フォン・ブランデンシュタイン (Gustav von Brandenstein) という、あとで陸軍大將になった軍人と結婚して、コレクションはバーデン＝ヴュルテムベルク州のビーベラッハの近在のミッテルビーベラッハにある夫のお城ブランデンシュタイン城に移った。彼らの長男アレクサンダーは、日本にも昭和 4 年の夏に飛んできたあのツェッペリン伯号という飛行船の製作者のツェッペリン伯爵の娘のヘレーネと結婚してアレクサンダー・フォン・ブランデンシュタイン＝ツェッペリン伯爵を名のってお城に住んでいます。このお城のなかのミッテルバッハ文書館にシーボルト・コレクションが保管され、今は夫妻の 5 人のお子さんのうちの長女と四男の一家が守っているようです。このコレクションのなかには、シーボルト関係文書のほかに 2 人の息子さんが収集した資料もあるようで、たいへん重要なコレクションですが、残念ながら目録はまだ作成されていません。

ついでにちょっとつけ加えておきますと、シーボルトの 2 人の息子は何れもたいへんな親日家で、兄のアレクサンダーは 40 年も日本の外務省に勤め、弟のハインリヒはオーストリア＝ハンガリー帝国の外交官として日本にやはり長期間滞り、日本のために大きな功績を残しました。残念なことこの 2 人の研究が日本人によってなされていないんです。ただケルナーの『シーボルト父子伝』でその手掛かりはえられます。もうひとつ残念なのは、ハインリヒの龐大な東洋コレクションは、晩年南チロルの彼のお城、フロイデンシュタイン城にあったんですが、彼の死後、遺産管理人がウィーンで競売してしまったことです。

以上、シーボルトの収集コレクションや、原稿がヨーロッパのいろいろな所に散ってしまった状況をざっとお伝えしました。現状では、その整理はかなり進められて

シーボルトのつくった統計表を求めて

いるんですが、問題はどこでも完全な目録ができていないことです。今度のルール大学東アジア研究所のシーボルト・コレクションの目録はその点で画期的といってよいでしょう。しかし、ここのコレクションは、ケルナーによると、長女ヘレーナが引き継いだ遺品の精々十分の一だそうです。ですからこれから方々に散った遺品のうち、せめてシーボルトがつくった原稿やノートや統計表などの文書の総合目録ができればと思います。そのとき気になるのはやはりソ連に持っていかれた資料です。それから、こういう文書の調査と並行して、そのほかの収集資料の調査も進めなければなりません。例えば法政大学の森先生は何回もドイツへ行ってシーボルトの収集した植物の調査をやっておられます。このようないろいろな分野からの調査や研究が発表されて、段々とシーボルトの全貌が浮かびあがってくると思います。私は偶然、日本統計事始めの一齣ということでシーボルトのつくった統計表探しを始めましたが、河野コサキという医師の論文だけはとうとう見つかりませんでした。しかし、第一回目の調査としてはまあ成功だと思っています。

最後に今度ロンドンの研究集会に出て感じたんですが、ヨーロッパでは徳川時代に日本へきた外国人の研究が結構盛んで、シーボルト研究はそういう日本研究の積み重ねの上に進められているということを感じました。例えば、17世紀の末、元禄時代に東インド会社の医師として来日し、帰ってから『日本誌』という、日本についての最初の総合的な本を書いたドイツ人ケンペル(Engelbert Kaempfer)について、オーストラリア国立図書館のボダート＝ベイリー(B. Bodart-Bailey)さんの「ブリティッシュ・ライブラリー所蔵のエンゲルベル

ト・ケンペルの草稿」という題の報告がありました。西ベルリンの中央図書館のクレムピンさんは、ボダート＝ベイリーが書いた、ケンペルが日本を調査するときに統計的手法を使ったという論文を読んだことがあるといっていました。これは聞きずてならない話です。そうすると私の日本の統計事始は元禄時代までさかのぼらなくてはなりません。まあこれは先の楽しみにとっておきましょう。

- (1) 細谷新治. 明治前期日本経済統計解題書誌：富国強兵篇. 東京，一橋大学経済研究所日本経済統計文献センター，1974-1980. 5 vol.
- (2) 小島勝治. “シーボルトと幕末統計文化”. 統計文化論集1. 松野竹雄，丸山博編. 東京，未来社，1981. p. 57-70.
- (3) 藤田喜六. “NIPPON の書誌学的検討”. シーボルト「日本」の研究と解説. 岩生成一ほか監修. 東京，講談社，1977. p. 59-82.
- (4) 沼田次郎. “西ドイツに現存するシーボルト関係文献について”. 近世の洋学と海外交渉. 岩生成一編. 東京，巖南堂書店，1979. p. 59-82.
- (5) Die Sieboldiana -Sammlung der Ruhr- Universität Bochum. Beschrieben von Vera Schmidt. Veröffentlichungen des Ostasien-Instituts der Ruhr-Universität Bochum: Acta Sieboldiana III. Wiesbaden. ca. 1989.
- (6) 田邊由太郎. シーボルト・コレクション(文献)の現状：オランダ・イギリス・フランス. 参考書誌研究. No. 22, p. 26-34 (1981)
Körner, Hans. シーボルト父子伝. 竹内精一訳. 東京，創造社，1974. 228 p.
- (7) ドベルグ美那子. 新資料発掘：シーボルト事件の高橋景保所蔵の二地図. 図書新聞. No. 580 (1988-2-13).